

二言語課題作文の分析結果から見える日本語で「書く」力 — 独日国際児のバイリテラシー形成過程の研究より —

池上摩希子 ikegami@waseda.jp

早稲田大学日本語教育研究科

1. はじめに

◆研究全体の枠組みと立場

- ・二言語を同時に習得するという子どもの営みは単独での認知活動ではなく、より有能な他者(親・教師・仲間など)との共同行為であり、葛藤や調整も含む動的な過程である
- ・二言語に媒介された活動への共同参加過程に関するデータを重層的かつ系統的に収集し分析する
⇒本発表/二言語による3種類の調査の一部

2. 本発表の目的

- ・児童にとって優勢な言語ではない日本語での読み書き力はどのように発達していくのか
⇒文字作文に現れる変化によって見る
*複数言語環境で生育する児童に対する作文指導など教育実践への示唆を得たい

3. 作文課題の概要

- ・内容と実施方法、実施時期
- ・分析の観点

4. 日本語作文の分析結果

- 1) 対象児5名のプロフィール
- 2) 作文に見られた変化と特徴
 - ① 文法能力
 - ② 談話能力
 - ③ 読み手に対する意識
- 3) 結果と課題
 - ・2年間での伸びについて
 - ・ドイツ語による教育と日本語による教育の比較
 - ・主題の限界性

5. 考察—ドイツ語との比較から捉えられる日本語で「書く力」—

- 1) 学校教育における明示的な指導との関連性
- 2) 日本語によるインプットの質と量
- 3) 教育実践への示唆

【関連の発表・論文】

- *柴山真琴・ビアルケ(當山)千咲・高橋登・池上摩希子 (2012) 「独日国際児の現地校・補習校の宿題遂行過程：親子の共同行為という視点から」『異文化間教育』36号, pp. 105-122, 異文化間教育学会
- *ビアルケ(當山)千咲・柴山真琴・池上摩希子・高橋登 (2013) 「バイリンガル児はどのように二言語で読書をするようになるのか：読書文化の世代間における伝達過程」『質的心理学研究』第12号, pp. 24-43, 日本質的心理学会
- *柴山真琴・ビアルケ(當山)千咲・池上摩希子・高橋登 (2014) 「小学校中学年の国際児は現地校・補習校の宿題をどのように遂行しているのか：独日国際家族における二言語での読み書き力の協働的形成」『質的心理学研究』第13号, pp. 155-175, 日本質的心理学会
- ◎柴山・ビアルケ・池上・高橋 「独日国際児のバイリテラシーの形成過程(2)：課題作文の縦断的分析を中心に」『異文化間教育学会第34回大会・ケース/パネル』2013年6月発表